作：風児 不弐王
『鼠と銀の懐中時計』

『鼠と銀の懐中時計』

　おじいさんの形見の懐中時計を指で撫でながら、おばあさんは、お気に入りのロッキングチェアーに揺られていた。
　窓からは、春の穏やかな日差しが、レースの白いカーテン越しに優しく差し込んで、ポカポカとおばあさんを包み込む。
　おばあさんは、いつの間にか、コックリコックリ、うたたねをしてしまったようだ。
　すると、キラリと銀の輝きを反射して、懐中時計がおばあさんの手から離れると、スルスルっと長いスカートの滑り台を滑り落ちた。
　懐中時計は、ガラスで覆われた文字盤を下側にしたまま床を滑り、壁ぎわの陽だまりに止まった。
　懐中時計の、なめらかな銀のボディが窓からの光を反射して、壁に開いた鼠の巣穴を照らし出す。
　スポットライトに照らし出された舞台に登場するかのように、一匹の鼠が穴から顔を出した。

「なんだなんだ？　このまぶしい光は？」
　鼠は、目をくらます光を前脚でさえぎりながら、いきなりの来訪者をいぶかしげに観察した。
「うーむ、どうやら襲って来る気配は無さそうだな」
「あなた、いったい何ですの？」
　穴の奥から、もう一匹の鼠が姿を現わした。
「うむ、今調べてみるから。お前はそこで待っていなさい」
　そう言うと鼠はまぶしさをこらえながら、懐中時計に恐る恐る近づいた。
　なにやら中から「チッチッチッ」と音がする。
　思い切って匂いを嗅いでみると、おばあさんがいつも使っている銀のフォークと同じ匂いだった。
「うーむ、これもおばあさんの食事道具だろうか？」
　そう言いながら鼻先でチョンと突ついてみた。
　反射する光を揺らして、懐中時計が波打ちながらくるりと半回転する。
「おや？　下側はガラスで出来ているのか」
　鼠は懐中時計と床の間に鼻先を突っ込むと、引っ繰り返してみた。
　鼠の巣穴を照らし出していた銀の光の反射は、一気に飛び去って行った。
「ああ、これは時計か？！」
　鼠はガラスに張りつくように文字盤をのぞき込んだ。
　いつもやかましい音を立てて時刻を告げる、あの馬鹿デカイ柱時計とそっくりな文字盤だ。
「間違いない。これは時計だ」

「ねえねえ、と・け・い、ってなあに？　パパぁ」
　いつの間にか、二匹の子鼠も懐中時計に張りついていた。
「お、おいおい！　まだ出て来ていいって言ってないぞ！」
「あら、でも危ない物ではないんでしょ？」
「お、お前まで……」
　パパ鼠の言うのもお構いなしに、子鼠たちは懐中時計によじ登り、ママ鼠はそのピカピカの輝きにうっとりした。
「ねえ、パパ！　この時計どうするの？」
「え？　どうするって……」
「持って帰えろうよ、パパ！」
「ええっ？！　こんなものを？！」
「いいじゃないの、あなた。ピカピカでとても素敵ですもの。私もそばに置いておきたいわぁ」
「ええっ？！」
「わーい！　わーい！　やったー！」
　子鼠達は大はしゃぎ。
「さあ！　キッチ、リッチ。運ぶの手伝ってね！　ほらっ！　あなたもボーッとしてないで！」
「は、はい……」

　というわけで、鼠の一家は懐中時計と一緒に生活することになった。
　鼠の一家の朝は、懐中時計とともに始まるようになった。
「あー、寝坊した～。急がなきゃ」
　朝のパパ鼠は、なぜか忙しそうに懐中時計で時刻を確かめる。といっても、時計を読める訳ではないので、だいたいの針の角度で判断するのだ。
　壁に立てかけた懐中時計に顔を近づけると、パパ鼠は知的な鼠を気取り、ひげを前足で撫でながら、少しむずかしそうな顔をしてみせる。
「えーと、長い針がここで短い針がここか……、こんな時間か！　いかん！　すぐに朝の散歩に行かなくちゃ！」
　散歩に行くだけなのに、なぜかあわててパパ鼠が巣穴を飛び出すと、次はママ鼠の番。

　ママ鼠は、懐中時計を壁に立てかけたまま器用にくるっと裏返すと、銀色でピカピカの懐中時計のボディに、自分の顔と身体を映してみる。
　うっとりしながら前足で顔や身体の手入れを始めると、これがいつまでたっても終わらない。
　子鼠、キッチとリッチが起き出して来て、「ねえ～、ママ～、おなかすいたよ～」と言うその言葉で我に返る。
「あらあら、いけない。ごめんね～、いま朝ご飯用意するからね」

　散歩からパパ鼠が帰り、皆で朝食が終わると、今度は子供達の番。
　懐中時計の、銀のボディの滑らかな曲線部分に顔を写しては、お互いの歪んだ顔を見て大笑い、大はしゃぎする。
　ガラスにべったり顔をくっ付けて、ジーっと針の動きを見ていたり、チッチッチという音に耳を澄ませたり。
　しまいには懐中時計は横倒しにされ、滑り台と化してしまう。
　さすがにこれには、パパ鼠の雷が落ちる。
「いいかげんにしなさいっ！　時計が壊れてしまうよっ！」

　銀の懐中時計とのこんな毎日が、なかなか鼠の一家は気に入っていた。
　今やこの鼠の一家にとって、銀の懐中時計は欠かせない存在になっていた。

パパ鼠の日課は、朝の散歩、昼の散歩、夜の散歩、深夜の散歩。
散歩のコースは、おばあさんの家の一周で、鼠の巣穴の有るリビングキッチンから始まり、ベッドルーム、客室、玄関、バスルーム、そして再びリビングキッチンに戻る。
この日もパパ鼠は、時間通りに昼の散歩に出かけた。
リビングキッチンでは、いつものようにおばあさんがロッキングチェアーに腰掛けていた。うたた寝でもしているのだろうか、チェアーは揺れていない。
ふと気になり、鼠は少し近寄ってみた。
おばあさんは起きていた。けれどもなぜか元気が無い様子だった。いつもはかすかに微笑んでいるのに、今日は悲しげに見える。
「どうしたんだろう？」
気になった鼠は、もっとよく見える様に近くの家具を器用によじ登ると、上からおばあさんの様子を見た。やはりあきらかに元気が無い。具合でも悪いのだろうか？
かたわらのテーブルには、飲みかけの紅茶が置いてあり、その横にはアルバムが広げてあった。
鼠は、一枚の写真に目を留めた。
おばあさんと、今は亡きおじいさんの写真だ。仲良く寄り添って、二人ともとても幸せそうに微笑んでいる。
二人の前のテーブルには、ロウソクの灯された誕生日ケーキが置いてあり、おじいさんの両手には、あの銀の懐中時計がとても大切そうに納まっていた。
「あの時計……、そうか！　あの時計は、おばあさんからおじいさんへのプレゼントだったんだ！」
鼠は、家具から落ちそうなくらいに身を乗り出して、悲しそうなおばあさんの顔をもう一度のぞき込んだ。
「ひょっとして、元気が無いのは、あの時計を無くしてしまったせい？」
再び写真のおばあさんとおじいさんを見る。二人とも、とても優しそうな笑顔だ。
実際、おばあさんはいつも鼠の一家に優しかった。
この家に来てからというもの、なぜかいつも同じ所にチーズやらパンのかけらが置かれていた。
最初のうちは単なるラッキーだと思っていたのだが、実はいつもおばあさんが用意して置いてくれたのだという事に、間もなく気が付いた。
鼠の一家はそれ以来、おばあさんの事がだんだん好きになって、いつの間にか感謝する様になっていた。

「そうだったのか！　ああ、なんということだ！」
　鼠は家具を駆け下り、一目散に巣穴に滑り込んだ。
　ドドドドドーッ！
「うわわわわっー！　とっ、とめてーっ！」
　あまりにも勢いがつき過ぎて、銀の懐中時計で滑り台をして遊んでいたキッチとリッチに激突してしまった。
「いったーい！」
「ひどいよー！パパあっ！」
　泣きベソをかいた二匹の小鼠達ににらみつけられながら、パパ鼠は腰をさすりつつ立ち上がる。
「あいてててて……、ゴ、ゴメンよお〜、キッチ、リッチ。大丈夫かい？」
「あなた、何事ですの？　ものすごい音がしたけど……。あら？　キッチ、リッチ、どうしたの？　また喧嘩でもしたの？」
「ち、ちがうよ〜っ！　パパがあ……いじめる〜」
「え？　パパにいじめられたの？　ちょっと、あなたっ！　子供相手に何やってるんですか！！」
　ママ鼠の目が、キッとつり上がる。
「えっ？　いや……、あの……、その……」
　しどろもどろなパパ鼠に、ママ鼠は容赦無い。
「あなたっ！　キッチとリッチに謝りなさいっ！」
「えっ？　……う〜ん、ゴ……」
「アナタッー！！！」
「ハイッ！　ごめんなさいっ！　ごめんなさいっ！　もうしませんっ！」
「わかればよろしいっ！　キッチ、リッチ、パパの事許してあげてね」
「はーい」
「パパ、あなたも大人げない事しないでね！」
「……はい」

　キッチとリッチは再び懐中時計の滑り台で遊びはじめ、ママ鼠は家事の続きにもどった。

「あ！」
　パパ鼠はふと我に返った。
「あの〜……」
「なにっ？　まだ何かあるのっ？！」
　キッと、にらみ返すママ鼠に動揺しながらも、パパ鼠はおばあさんの事をなんとか説明した。
「そうだったの……。おばあさんにとって、そんなに大切な物だったのね。いつも私たち家族は、おばあさんに大変お世話になっているし、私、とても感謝してるわ。しかたが無いわね。時計は返しましょ」
　ママ鼠は微笑みながら言った。
「え〜っ？　返しちゃうのお？」
　キッチとリッチは不満そうだ。
「おばあさんにとっては、とーっても大切な、おじいさんの想い出の時計なんだよ。自分の命と同じくらいにね」
　パパ鼠はキッチとリッチの頭を優しく撫でながら言った。
「そーかあ、じゃあ仕方ないよね」
「時計無いと、おばあさん可哀想だもんね」
　キッチとリッチも、ようやく納得した。

　鼠の一家は力を合わせて、銀の懐中時計をおばあさんの足元まで運んだ。
　しかし、おばあさんは考え事をしているのか気が付かない。
　パパ鼠とママ鼠がおばあさんのスカートの裾を引っ張り、キッチとリッチはおばあさんに向かってチューチューと鳴いて呼んだ。
「あら？　何かしら？」
　おばあさんは自分の足元を見てびっくりした。
「まあ！　どうしたの？　あなた達……」
　そう言いかけて、銀の懐中時計に気が付いた。
「ああ！　あなた達！　私のために、その時計を見つけて来てくれたのね？！　なんて事でしょう！！」
　おばあさんは、嬉しさと感動のあまり紅潮させた頬に両手のひらを当て、鼠の一家に向かって話しかけた。
「ありがとう。ありがとう。本当にありがとう」
　おばあさんは銀の懐中時計を手に取り、何度も何度も感謝の言葉を繰り返した。

「おばあさん、よろこんでたね」
「うん」
「うふふ。良かったね」
「うふふふ、良かったね」
　巣穴に戻った後、キッチとリッチもなんだか嬉しくなり、はしゃいでいる。
「返して本当に良かったわ。あんなに喜んでもらえるなんて」
「うん。そうだね。良かった良かった。その上、こんなご馳走ももらえたしね」
　その晩の鼠の食卓は、おばあさんがお礼にくれた凄いご馳走で山盛りになっていた。

　それから一週間後。
　パパ鼠がいつものように朝の散歩に出かけようとすると、巣穴の前に何かが置いてある。
　何だろうと手に取ってみると、人間が着ているシャツという服にそっくりだった。でも、どう見ても鼠サイズ。
　ひょっとしてと思い。パパ鼠は家族を呼んで来ると、皆でそれを身につけてみた。

　パパ鼠には焦げ茶色の、
　ママ鼠には赤い色の、
　お姉ちゃん鼠キッチにはピンク色の、
　弟鼠リッチには黄緑色の、
　シャツ。
「あなた素敵よ！」
「君こそすばらしい！」
「おねえちゃん、きれいだね！」
「リッチもかっこいいよ！」
　鼠の一家は大喜び。さっそくおばあさんにお礼を言いに行った。

　鼠の一家のお礼はチューチューとしか聞こえないが、にこにこしながら見てるおばあさんには、ちゃんとその意味が分かっている。
　四匹並んでお礼をする姿を見ていると、おばあさんはますます鼠の一家が好きになってしまった。
　鼠の一家も、そんなおばあさんがどんどん好きになっていった。

やがて冬になり、そしてクリスマスイブの朝。
おばあさんはクリスマスソングを口ずさみながら、鼠の一家にプレゼントするセーターの仕上げをしていた。

すると、鼠の一家がいそいそと、おばあさんの前に姿を現した。
鼠の一家は五匹になっていた。
そう。
赤ちゃん鼠が産まれたのだ。
それはそれは元気な、チッチという名の男の子。
おばあさんは、自分の事のように喜んで、鼠の一家に何度も何度もお祝いの言葉をかけた。
「あら、そうだわ！　急いで赤ちゃんの服を作らないと」
そう言うと、おばあさんはあわてた様子で、でも、とても嬉しそうに編み棒を手にとった。

編み物をする、おばあさんのかたわらには、おばあさんとおじいさんが寄り添って幸せそうに微笑んでいる写真が飾られていた。
その脇で、銀の懐中時計がやさしく輝いていた。